

第13回「千葉県子どもの人権懇話会」報告集 (基本テーマ「当事者が語る施設生活と今」)

2016年11月3日(木・祝) 10:30~12:30 千葉市きぼーる3階子ども交流館・参加者108名



パネリスト：阿部俊幸さん(新聞配達をしながら役者の修行中)
石橋涼子さん(現在子育て奮闘中)
川瀬信一さん(児童自立支援施設・千葉県生実学校内の学校の教員)

コーディネーター：光元和憲さん(ちば心理教育研究所 所長)

司会：米田修(こども人権ネットちば事務局長)

米田：本日の子どもの人権懇話会は、児童養護施設の卒園者の3人のみなさんから、それぞれの施設での生活と今の生活について、お話を聴くものです。今回の懇話会は、来年12月に千葉市で開催される「日本子ども虐待防止学会ちば大会」のプレイベントとして開催する「ちばこどもおうえん広場」の一部として取り組みました。当人権懇話会は2005年から毎年開催しており、これまで教育問題、児童福祉問題等の「子どもの人権」について市民と行政と一緒に学んでおり、一昨年はいじめ問題、昨年は子どもの貧困問題をテーマにしています。

光元：ちば心理教育研究所で、大人、子どもを対象にカウンセリングをおこなっています。月2回、児童相談所でも虐待をやめられない親御さんのカウンセリングにあたっています。今日フロアの皆さんが3人のシンポジストから聞きたいのは、おそらく、「児童養護施設で育ったにも関わらず……」、あるいは「児童養護施設で育ったからこそ……」にからむことなのではないでしょうか。一般には親子を血縁で考えます。しかし、血縁があろうがなかろうが、家族として機能しているかどうかの方が大事です。家族とは何か、家族の機能とは何か問われています。

〔自己紹介〕

阿部：いすみ市の子山ホームで育ちました。今は読売新聞の配達をしながら演劇をやっています。

石橋：房総双葉学園の出身です。子ども3人と主人と5人で生活しています。

川瀬：中学・高校時代に、里親家庭、児童自立支援施設、児童養護施設で育ちました。現在は、自分が育った児童自立支援施設で働いています。

〔施設に入ったいきさつ〕

光元：まず、どういうことがあって施設に入るようになったのでしょうか？

阿部：妹が生まれたとたん、母親からの暴力が始まりました。ご飯はなし。家の中にいられなくなりました。父親が家を出たのがぼくが小1で、その時から死を思い始めました。生きていくのもいやで、神様に、まともな生活をしたいと祈りました。でも児童相談所で幸せになれました。児相の保護所に半年いて、子山ホームに行きました。

でも施設には施設の暴力がありました。中1のとき担任の先生に「お前は海みたいに広い人間になれ！」と言われたのがきっかけで、映画やドラマを観て、自分は俳優になって子どもたちに夢を見させたいと思うようになりました。

光元：家でも大変、施設でも大変、大変な生き立ちですね。中1の時の先生の言葉「海のような広い人間になれ！」はすばらしい言葉ですね。人を支えるのは何か。虐待の連鎖、つまり親世代から子ども世代への連鎖の率は1/2～1/4と言われます。逆にいうと、それ以外は連鎖しないということです。自分の困っている状況をわかってくれる大人、「まともな大人」との出会いこそが大事です。その子の境遇をわかってくれる大人、たとえば保育士や、学校の養護教諭、あるいは近所に住むクラスメートのお母さんや、親戚のおじさんといった「まともな大人」とのかかわりがあれば、相当程度連鎖を防いでいけます。「まともな大人」というのは、自分の都合で子どもを利用しない大人のことですが、阿部さんの出会った先生は「まともな大人」の一人なのだと思います。

石橋：私はごはんが飢えている子だったそうです。3才の時に施設に入ってガツガツ食べていたらしい。本当にごはんが嬉しくてガツガツいってました。

光元：衣食住は大事です。家族の機能として私は三つ考えています。①融合機能、②共存機能、③保障機能、の三つです。衣食住は三つめの、保障機能にあたります。

川瀬：両親と、九つ離れた弟がいます。小学生の頃、家がゴミ屋敷で、風呂に入れず、ゴミの上で寝ていました。ネグレクトでした。母は多動傾向のある私に暴力をふるいました。私はいろいろな友達の家遊びに行っていました。父親が政治家の同級生、フィリピン人の同級生、なぜかいつも家におばあちゃんしかいない同級生……いろいろな友達の家を誘ってもらって、よくしてもらいました。でも、友達をゴミだらけの自分の家に誘うことはできません。自分の家がおかしいことに気付き、友達を呼べるような普通の家で暮らしたいと思うようになりました。

小学校2年生の時、域内転居をしました。前に通っていた学校は、自転車で通える範囲でした。高学年になったとき、前の学校の友達の誕生日会に行き、帰りが遅くなってしまいました。家に帰ると、母親がシチューを用意していました。「何でこんな遅くまで帰ってこないんだ！」と怒られて、シチューを頭からかけられました。風呂場はゴミだらけで使えないので、シチューを水道水で洗い流して学校に行きました。先生が異変に気付き、おそらく児童相談所に連絡をしたのではないかと思います。母親は私を連れて児童相談所

に通所するようになり、やがて一時保護されました。一度目はそのまま家に戻ったのですが、家の状況は相変わらずでした。私は家を避けて、深夜までゲームセンターで過ごしていました。

小学6年生のときに、再び一時保護されました。そのとき児童相談所の心理司が、「施設で暮らしたいか、里親さんのもとで暮らしたいか」と、選ばせてくれました。友達を家に呼べるような普通の家で生活したかった私は、里親家庭を希望しました。

ほどなくして、市内に里親が見つかりました。児童相談所の職員は、私が里親を希望していることを知り、市内で私を受け入れてくれる里親を見つけた上で、どちらがいいかを自分で決められるようにしてくれたのだと思います。

里親は私を家族の一員として受け入れようと考え、雨戸を閉める、花に水をやるといった手伝いをして欲しいと頼んできました。手伝いは簡単そうだったので、できるだろうと思っていました。でも、これまで何かを習慣づけてやった経験がなかったので、お手伝いができませんでした。当時、「ドクターグリップ」という筆記具が学校で流行っていました。私も欲しかったのですが、里親に「買ってほしい」とか、「お小遣いを増やしてほしい」とは言えませんでした。やむなく、里親の貯金箱からお金をとったり、万引きしたりしてしまいました。そのことが発覚して、里親の下での生活を続けることができなくなってしまいました。

児童相談所の一時保護所で心理司と話しているとき、自分の課題がわかりました。児童自立支援施設に対する先入観がなかったので、抵抗なく移りました。児童自立支援施設で1年間過ごしました。児童自立支援施設を離れる前日、「明日離校だよ」と言われました。

「こういう生活がしたい」という理想を描く間もなく、一宮学園に移りました。一般家庭の同級生から、「学園の子」と言われるのがつらくて、不登校になってしまいました。でも、学校に行くことを、施設職員は強要しませんでした。

〔施設での生活〕

光元：施設で暮らしたことをどう感じていましたか？

石橋：小学校に入って、施設で暮らしていることを、「恥ずかしい」と思いました。「なんでこんなところにいるんだろう！」と。18歳で卒園するまで恥ずかしさは続いていました。自分の生い立ちを友達に話したら、「ネグレクトされた子どもたち、かわいそう！」と泣いていました。そのことがまた恥ずかしかった。今はぜんぜんそうは思わなくなりました。今から考えると、あの当時、「自分はかわいそうじゃない」と思っていたのに、「かわいそう！」と言われたことがイヤだったんですね。

川瀬：よくわかります。施設にもいろいろな子どもがいるのに、「学園の子ども」と一括りにされることがあります。1人の子が施設の不満を言うと、「施設って大変なんだ」と思われたりします。だけど、中には安心して生活している子どももいます。

光元：石橋さんはどうでしたか？

石橋：施設に入ってうれしかったのは、誕生日が祝われたこと、相談できる仲間があったこと、栄養バランスがいいご飯があったことです。就職活動が嫌で逃げたことがあったけど、園長先生は見捨てなかった。つらかったのは洗濯です。クラスの友達是谁ひとり家で洗濯などしてないのに、私は洗濯だけでなく、掃除や草むしりもしなくてはならなかった。強制のマラソン大会もとても苦痛でした。集団で生活するので、決められたルールがたく

さんあったことがつらかったですね。

光元：大人に依存することが禁止されていたということかもしれませんね？ 自立が求められるということでしょうか？ そのことをどう感じていましたか？

石橋：みんなは遊べていいな、と感じていました。次の日に、テレビの話など、友達の話についていけなかった。

光元：施設だから、といういい面もありますが、集団生活のルールが過剰で、もう少し甘えさせてあげてもいいかな、という思いも私にはあります。いま自分のお子さんが9歳だと、そういうことが頭にちらつくこともありますか？

石橋：自分の子には何もやらせていません。やらせてないことに抵抗感はありません。子どもにやらせないで、私が自分でやってしまいます。

光元：阿部さん、施設の生活でよかったことは？

阿部：食事、寝るところがあるだけでうれしかった。友達とどうやったら仲よくなれるか。相手の好きな話に合わせてたり、スポーツを一緒に楽しんだり、バンドも一緒にやりました。掃除、家事、チャリンコを直すこと、これらは自立した時に役に立ちました。卒園した子どもたちに教えていきたい。職員になることも勧められましたが、今はやけくそでも、「オレはこうなる！」という姿になりたいですね。そのことが子山ホームに親孝行、恩返しになるかと思うので。子山ホームには本当に感謝しています。

光元：川瀬さんのお母さんは片づけができず、家がゴミ屋敷になったのはADD（注意欠陥障害）という発達障害が考えられます。ひとつのことに注意が集中できず散漫になってしまい、結果的に片づけが追いつかないということかもしれません。川瀬さん自身、多動傾向があるというのは、お母さんにもそういう傾向があるのかもしれないな、と思います。

阿部さんは「友達をつくろう」と思った。自分から寄り添っていかうとしたんですね。待っていても友達はできません。相手に関心を持っていることに関心を持つことは「愛」の第一歩、友達をつくる第一歩です。自分のことにしか関心をもたないのは「自己愛」です。子どもが関心を持っていることに、親が関心を持ってやる、つまり親から「愛」をもらえると、その子も人に関心をもち、人を愛せるようになります。親が無条件にわが子を受け入れ、愛着を育ててやるのが、家族の3つの機能のひとつ、1番目の融合機能です。

一般に、自分の衣食住が保障されることで生活の土台ができ、その土台のうえに立って、家族の者だけでなく、家族以外の人とも、互いに共に生きていこうという姿勢が育まれていきます。これが家族のもつべき機能の2番目、共存機能です。

阿部さんは「子山ホームで働かないか？」と言われたとのことですが、阿部さん、生き延びられて本当によかったですね、と改めて思います。

〔これからのこと〕

光元：石橋さん、これからのことで、何かやりたいことはありますか？

石橋：とりあえず子どもたちを大学まで行かせたい。自分ができなかったことをやらせてあげたい。それくらいかな。

光元：子どもたちから「ママのお父さんお母さんはどうしたの？」と聞かれて、「いないんだよ！」というとき、悲しい気持ちはありませんか？ 「会いたい」とかありませんか？ きょうだいに会いたいとか、いつか話そうと思うことはありますか？

石橋：たまに施設に遊びに行き、「ママはここで育ったんだよ」と答えています。聞かれたら答えたい。

光元：人間は自分のルーツを確認したがる存在です。自分のルーツを確認しないと生きられない生きものです。子どもたちが聞いたときには話してあげてほしいです。そうすれば、子どもたちは自分の人生を間違わずに生きていかれると思います。

〔今のこと、今後のことで付け加えたいこと〕

光元：今日のシンポジストは20代前半の方、20代後半の方です。今のこと、今後のことで付け加えたいことはありますか？

阿部：12月22日に船橋宮本公民館で公演があります。演劇を2年やっていて、ダブル主演をやります。合唱、殺陣もあるので、観にきてほしい。

川瀬：三つの問題意識と、それに応じてやりたいことがあります。

①18歳で自立は可能なのか？——私が生活を自分で回せるようになったのは25歳を過ぎてからです。衣食住のうち、とくに「住」に困りました。社会的養護のもとで育った若い人たちを対象としたシェアハウスをやりたい。

②当事者の声はどこにあるのだろうか？——「施設養護はひどい」「里親には任せられない」などと、異なる立場が互いを非難しあっている光景がみられます。当事者は自分の育った環境をどのように振り返っているのでしょうか。「忘りたい」「もう過去のこと」との思いから、当事者の声が表に出てこないこともあります。今年中にインタビューサイトを立ち上げたいと思っています。当事者へのインタビューを記事にして、Web上で公開します。自身の育ちについて、よかったと思っている人、しんどかったと思った人、いろいろな人がいると思います。様々な当事者の声を知りたい。

③施設職員の教育に携わりたい。——社会的養護の認知は広がった一方で、現場では若い人がどんどん辞めてしまいます。勤務が不規則な上に、感情を使って子どもと向き合うハードな仕事だからでしょう。制度の改善など前向きな変化がある一方で、施設職員一人ひとりの負担が増えています。10年、20年先に、血縁に依らず、みんなで子どもを育てるような社会を実現したいですね。

〔施設職員に注文したいこと〕

光元：施設で暮らしてみて、施設職員に注文したいことはありますか？

阿部：小学校のとき施設職員が少なく、職員がいないときに襲ってこられました。子どもと大人のコミュニケーションが大事なので、大人は多い方がよい。ちゃんと本心で話ができる子どもはうれしい。子どもは不器用なので、大変ではあるが、ちょっとでも気にかけてほしい

石橋：職員に辞めないで働きつづけてほしい。急にいなくなれるときびしい。残された子どもたちは職員のことを親同然に思っているのです。近くにいてほしい。

光元：職員がどんどん辞めていくというのは、私も同じ印象をもっています。若い人がもちこたえられなくなっていると思います。川瀬さんが職員の教育に関わりたいということに共感します。反抗期をのりこえられ高校生になった子どもに、「なぜ乗りこえられたの？」と聞いてみたことがあります。「担当職員が逃げないでいてくれた」と語ってくれたことが印象に残っています。職員への支援が必要です。

【質疑応答】

Q：佐藤（自立援助ホーム職員）

施設にいた子ども時代に、職員に対し何か思ったことはありますか？

阿部：自分が高校1，2年になった時、その子どもの顔を見れば、職員の対応がまちがっていることがぼくにはわかっていました。「何で大人はわかってあげないの？」と感じていました。「子どものぼくですらわかっているのに……」と。

石橋：一方的に怒るのではなくて、話をきいてほしい。相手の子が先にしかけてきて、でも結果的に自分が相手にケガをさせてしまったことがありました。そのとき一方的に怒られたのだけど、最後まで話をきいてほしかった。

川瀬：施設で生活したことは自分にとって必要な経験だったし、感謝しています。そのうえで、「こうしてほしかったのに」と思うことが二つあります。

一つ目は、大学に合格したときのこと。大学には入学金や授業料を免除するしくみがあることがわかりました。そのことを職員に伝えたら、「〇〇大は優秀な人が大勢いるんだ。お前が受かったのはたまたま。免除なんか通るわけがない」と言われました。その言葉を鵜呑みにした私は、申請を諦めました。結局、免除の基準が自分にも当てはまることを知って申請をしたのは大学に入ってしばらく経ってからで、もし入学と同時に申請をしていた場合と、100万円近い差が生まれました。今振り返れば、その職員は学歴コンプレックスがあったように思います。職員の一言に悪気はないと思うが、自分の価値観や子どもとの関わりの傾向をきちんと理解して接してほしい。

二つ目は、中学生で不登校になったときのこと。当時、暴れてものに当たっているうちに、玄関のガラス扉を割ってしまいました。何とかしたいけれど、自分をコントロールすることができない。学校に通えていないことに不安感があつた。職員は、私を精神科に通院させ、投薬治療を受けさせました。そのとき私が欲しかったのは、薬ではなかった。「学校行こうとして、目覚ましをかけているんだね」「無理しないでいいよ」と声をかけてほしかった。

光元：暴れることのみをやめさせようとする職員側の意識が、子どもを病院に連れて行くことになってしまう面があります。何で暴れているのかを理解しようという姿勢が大事です。「心」とは目的意識です。「なんで、なんの目的で暴れているんだろう？」という問いへの答えが「心」です。投薬治療は行動を鎮めることには役立つでしょうが、同時にだれかが「なぜ暴れるんだろう？」と理解し、察してあげることが必要です。察してもらえることは癒されることです。「大学に受かったのはマグレだろう」という「悪気はないが、無理解な一言」は「迷惑」です。それはその職員の「自己愛」でしょう。

Q：千葉明徳の大学生です。

生い立ちをここまで話せるようになるのに、時間はどれくらいかかったのでしょうか？

阿部：中1の先生が辞めることになって1週間で自分をさらけだせました。暴露して、性格を変えようと思いました。中3で、好きだった女の子から「変わったね」と言われてうれしかった。

石橋：ずっと恥かしいと思っていました。卒園してから「何を恥ずかしかったんだ」と開き直れた。

川瀬：大学でさまざまな人に出会って、自分の生い立ちを話せるようになりました。今年

になって、このような場でお話させていただく機会が増えました。仕事が安定して、自分で生活を回せるようになったことは大きいですね。話すことで、自分の問題意識が明確になりました。チャンスにも恵まれました。自分のことを伝えることが済んだら、次はもう少し広い視点に立てるのだと思います。

光元：川瀬さんはかなりすさまじい環境にあって、「この人は虐待が連鎖するかなあ？」と心配していました。でも、どうやら就学前の時期、おばあちゃんから無条件で受け入れてもらえた経験があったようなので、連鎖を避けそうだなと思っています。無条件に愛される体験は後々の財産になります。開き直れるし、生い立ちを引き受けられます。自分の生い立ちの中の恨みを手放していけます。恨むことで憎い相手にしがみついていた手を放すと、その手は、今度は自分のために使っていけるようになります。施設での生活自体が連鎖を防ぐものであってほしいです。

川瀬：施設を離れたあと、親を許すことが私の課題でした。何かうまくいかないことがあると、親のせいにしていました。私を施設に預けたときどういう気持ちだったのか、親に直接聞いてみたかった。子どもを支援する立場になってみて、親の状況や能力を客観的にとらえることができるようになりました。対話はできていませんが、楽になりました。

光元：親にも限界があることがわかることが自立につながります。親が持っていないものをねだっても仕方ない。ないものねだりしても仕方ないと納得いくとき、親を赦すことができるかと思います。

Q：成田 学生

本当の両親とは現在つながりがありますか？

阿部：父は離婚してどこにいるかわかりません。母親とは3カ月に1回電話します。母親はぼくを生んでくれた人。でも、育ててくれたのは子山ホーム。妹に対しては、妹がいるせいでこんなことになったと思った時期もありました。今は自分にもゆとりができました。

石橋：母は老人ホームで亡くなりました。父親は戸籍に名前がありません。兄は生活保護。2番目の兄は一緒に施設にいましたが、今は連絡をとっていません。

川瀬：親と最後に連絡をとったのは、大学院に進学することが決まった22歳のときです。伯父伯母家族とのつながりは今もあります。伯父伯母は、私の母親と接点をもってほしくないと思っています。弟は特別支援学校にいたようです。彼らが住んでいる地域で事件が起きると、「自分の弟がやったのではないか」と不安になることがあります。

光元：秋葉原事件があったとき、事件が報道された直後に、犯人の父親が、犯人の弟に、「すぐに職場を辞めろ」と言ったそうです。のちのちその弟は自殺を選んでいます。血縁にはプラス面と、マイナス面があります。

Q：児童養護施設の子どもたちが掃除、マラソン、相撲がいやだったと言う。子どもどころ理不尽なことをされた時の気持ちをききたい。

阿部：マラソンは生活の一部として受け入れていましたが、「何でこんな寒い時に練習やるの？」と思いました。高1のときアルバイトをやりたくて、休みたいと申し出たとき、「必ず2年生で賞をとるから」と約束して休みを認めてもらい、次の年に1位になりました。

石橋：けっこうマラソンはきびしかった。タイムをはかり、プレッシャーをかけられました。しかたなく参加しましたが、おかげで賞をとれたこともあり、辛かったけど賞をとれ

てよかった、と思ったこともありました。

川瀬：私はマラソン大会が好きだった。なぜかというと、児童相談所や児童自立支援施設でお世話になった先生に、「元気でやっています！」と報告できるのがうれしかったからです。児童自立支援施設には、折り合いをつけて入ったから、不満を感じたことはあまりありませんでした。一宮学園でも、強制されることはなかった。高校時代はバイト、野球部、子ども会のボランティアなどであまり施設にいなかったの、施設に対する不満はなかった。

Q：金田（こども人権ネットちば）です。

学校での集団生活の中では一般家庭の人たちがいる。その人たちに対して「どう接してほしい」ということはありますか？

阿部：いろんな子たちがいる中で、わかる機会があればいい。学校でいじめがなかったのはデカかった。学校でいじめがあれば、大人が子どもに教えてあげるべきだと思います。

石橋：私の施設の子で万引きがありました。一人やると施設のみんながやっていると思われたことがありました。「あの子と友達にならない方がいい」とか思わないでほしい。

川瀬：施設で生活している子どもが一般家庭の子どもからどう思われるかは、一般家庭の親が、施設で生活している子どもをどう思っているかに関わっていると思います。たとえいろんな子どもがいても、親が子どもに理解を促してほしい。施設の子どもは、施設の中と外でいろいろなことを感じながら生活しています。施設もオープンにしていく必要があります。地域の方が施設の子どもや職員と触れ合う機会が増えれば固定観念も少なくなるのではないかと思います。

〔今日の感想〕

光元：最後に一言感想をお願いします。

阿部：慣れているつもりだったけど、真剣に話すことは緊張します。俳優もやっているので、言い続けていきたい。

石橋：すごく緊張しています。

川瀬：ここに参加されている方は多様だと思います。様々な方が、児童養護施設の子どものために行動してくださっていることがありがたい。それが次の活動の原動力になっています。

光元：全国児童養護施設協議会倫理綱領（配布資料1～2ページ）の2に「自らの思い込みや偏見をなくし、子どもをあるがままに受けとめ、一人ひとりの子どもとその個性を理解し、意見を尊重しながら、子どもとの信頼関係を大切にします」とあります。時に、自分の考えを語っているつもりで、じつは自分の偏見を語っているに過ぎないこともあります。家族を血縁でしぼることも偏見のなせる技です。血縁があってもなくても家族として機能することが大切です。

今日はとてもありがたい機会をいただき、胸が熱くなりました。パネリストのみなさんありがとうございました。

（大きな拍手で終了）

《以上・口述筆記・岡田泰子》

第13回「千葉県子どもの人権懇話会」アンケート集計

回答枚数：36枚

1. これまでこの会の参加したことがありますか？

①はじめて 26 ②2回目 2 ③3回以上 8

2. この情報をどこで知りましたか？

①関係団体新聞 9 ②友人口コミ 14 ③公共機関設置のチラシ ④新聞 ⑤WEB
サイト 2 ⑥その他 10 不明 1

3. 「子どもの人権懇話会」はいかがでしたか、わかったこと、今後に生かせること、ご感想、ご意見等を自由にお書きください。

- ・当事者のお話しをきくことができ、現実・現状を知ることができました。偏見を持たず、地域の家族を見守っていきたいと思いました。
- ・当事者の方々のお話しはとても胸につまり、よくその現状から今を生きていらっしゃると、その強さや力はどこにあるのかがお話しをうかがって少しわかったように思います。息子の同級生も施設から登校し、我が家にも遊びに来てくれた子がいました。その時、大人として向き合えていたか、振り返る時間にもなりました。ただ聞いただけにせず、今後の活動に活かしていければと思います。
- ・とてもよかったです。今後も多くの方へ、当事者の声を届けてください。偏見に気づける機会となりました。
- ・「偏見」学校内では多様性が認められず、内々に秘める思いがあると思う。
- ・パネリストの阿部さん・石橋さん・川瀬さんらが、今のご自分を大事にして前向きに生きている姿に感動しました。阿部さん…役者さんになってくださいね。自分の言葉でご自分のことを話すのはとても勇気のいることです。舞台上いろんな自分を表現してください。石橋さん…とてもはじめて人前に出て話しているようには見えませんでした。おちついて しっとりとしていて すてきな奥さん やさしいママなんですよ。結婚されることで、お義父さん お義母さんができて甘えることもしっかりしてくださいね。川瀬さん…お話しも上手で、にこやかで、すてきな青年。目標に向かってこれからの活躍もついつい期待しちゃいます。みなさんありがとうございました。施設で育つ子、育てられた方達を特別視はしたくないけど、応援できることはしたいと思えました。
- ・たくさん素晴らしいお話しを聞くことができ、心より感謝しています。今日という日を忘れずに、これからの生き方に活かしていきたいと思います。成長できた1日でした。本当にありがとうございました。
- ・施設で生活をしてきた子どもが今大人になり、どんな生活をされていたか、思いをしてきたかという事実を知ることができました。母として保育士として今日のお話しを活かしていけるよう、自分の子、保育園へ持ち帰っていきたくと思います。貴重なお話し時間をありがとうございました。準備して下さったスタッフの方々、ありがとうございました。

- ・施設で育った子どもたちも私たちも、子どもの頃の気持ちは共通することが多く、大人になった今、昔を振り返った時の気持ちも共通することが多いことを考えると、違いは紙一重だと思った。まさに、私も今ルーツに興味がある、自分がどこから来て、どこに行くのか、何を次に残すのか。子どもは神様からの預かりもの。どんな子どもも一生懸命思いをかけ、愛をかけ、神様に戻したいと思います。講演者のみな様、スタッフの皆様ありがとうございました。
- ・テレビのドキュメンタリーや福祉番組ではなくお話しが聞けてとてもよかったです。お話しできるには、とてもとてもたくさんの心の作業が必要だったと思います。大切な自分の現実のお話しを語っていただき、ありがとうございました。現実にあった本当のキズついた気持ちなど、違和感などに共感できたりして、ジワっとわかるわかる・・と思うと、いろんな出口につながる気がします。
- ・児童養護施設の実情をはじめで知りました。各地でこのような講演会があると、地域の理解が深まると思います。
- ・貴重なお話しを聞けて、大変有意義な時間でした。光元先生のお話しを聞き、自分も癒されました。
- ・お話しくださった3名の方に感謝の気持ちです。今、幸せそうに生活されている姿は、すべての大人、支援者の何よりの励みになったと思います。子をもつ親としても大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・当事者のお話しを聞くことができることがとても意味のあることと感じます。ソーシャルワーカーを学ぶ学生ですが、傾聴の大切さや行動の中にどんな意味があるのかを探ることを改めて意識しようと思いました。私はこのような場に来ることで自分の中の「偏見」と向き合うことができているのでは、と感じます。ショックに感じることもありますが、新たな気づきを得て良いソーシャルワーカーとして、社会の中で生きていければいいと感じました。今後もこのような場をつくっていただけたらと思います。ありがとうございました。
- ・とても参考になりました。
- ・色々と思うこと、考えることがある良い機会でした。まず、知ることから 関心を持つことからはじめたいとおもった。身近にいる人に私自身の言葉で、今日感じたことを伝えてみます。今日はありがとうございました。
- ・当事者のお話しを聞ける良い機会と思い参加しました。よかったです。自分のバイアス少なからずあります。それに気付きました。
- ・児童養護施設に、これから公私ともにかかわっていきたいと思っています。今日のお話しを活かしていきたいです。
- ・今まで遠い存在だった「施設の子どもたち」を身近に感じることができました。様々な事情で入所している子どもたちが「心から信頼できる大人」がいることで、安心して自立していけることが伝わってきました。これはどの子どもにも共通することで、我が子や我が子でない子にもそのような大人の存在でありたいと感じました。ありがとうございました。
- ・今日は当事者の貴重な話を聞くことができ、参加してよかったと思います。ありがとうございました。
- ・大変具体的なお話しをきけて、ありがとうございました。これから、自分でできることは、何かを考えていきたいと思っています。

- ・感動がありました。気づくことがたくさんありました。ありがとうございました。
- ・子どもへのいじめが子どもは気が重く感じていることがわかった。利他をもって生活することで子どもの手本となることが大事だと感じた。
- ・生の声を聞くことができすぎてすごくよかった。施設の生活の大変さ、また楽しかったことなど、自分の思っていた偏見を少しでもなくせた気がします。勉強になりました。
- ・児童養護施設職員と、考えさせられ、反省すべき点があると気づかされる機会になりました。今日のお話しを持ち帰って、他の職員にも伝えたいと思います。
- ・お話しいただいた方の人としての自立感を強く感じました。いろいろなつらいご経緯を糧として人としてとても素晴らしい力がおありだと感じます。それは、とても説得力もあり、人の気持ちを動かす力があると思います。これからも、がんばってほしいと思うのと同時に、自らのテーマをみつけようと思います。
- ・いま、学生で保育の資格をとる勉強中です。卒業後、施設で仕事をしたいと考えていて参加しました。施設で育った人の話を聞いたことがなく、それぞれに違った気持ちで過ごしてきたのだと知りました。職員次第で子どもが変わるということを知り、とても貴重な役割をもつ仕事だと考えました。自分がどれだけ子どもの気持ちに寄り添えるかわかりませんが、これからも勉強していきたいと思います。
- ・タイトルの「当事者が語る施設生活と今」について、もっともっと当事者の話を聞きたかったです。阿部さん 石橋さん 川瀬さんの話が聞けて、本当によかったです。ありがとうございました。
- ・ばくぜんと想像で考えていたことと、具体的な話、本音で話してくださったことで新たな理解を持つことができました。ありがとうございました。子どもたちと接する中で生かされるキーワードがたくさんありました。活かしていきたいと思います。
- ・主任児童員です。研修で施設を見学したり、施設で作ったビデオを見たことはありましたが、当事者の話、ナマの声をきけてよかったです。光元先生のコメントや解説もよかったです。今日の話を生委員の会議で報告したいです。
- ・たいへん貴重なお話しを聞くことができました。3人の体験を聞くことができましたこと、お話しくださったことに感謝いたします。前向きに生きていく姿に感動しました。
- ・「当事者が語る」お話しは、大変有意義でした。今後の仕事にいかしていきたいです。
- ・色々なことを乗り越えて自立され、すばらしいなと思いました。貴重なお話しをありがとうございました。
- ・まず「知る」ということと思いました。子どもの現状を伝える機会や手段は、最近は多くなっただと感じてはきましたが、当事者のさまざまな話はまだきけなかったなと思います。
- ・それぞれにすばらしい人たちで、とてもすばらしいと思いました。憶えている経験からとても落ち着いて話してもらえました。時々、テレビや新聞で報道されているような内容なんだと確認できたのですが、本当に胸がつまりました。幸せな結婚をされて若いのに3人の子育てをされている石橋さん、夫さんの理解、夫さんの両親の協力と、ご自分で切り開いたこれまでの人生のたまものですネ。本当に忙しいでしょうが、お幸せに。(お仕事、福祉関係をされていたんですよネ)ちょっとボランティアでかかっている施設で、2歳くらいの女の子に昼食をいっしょうけんめい食べさせている若い女性職員の姿を見て、泣いて食べない子にずい分手こずっていましたので、毎日大変だなあと感じました。養護施設の中が、子どもたちにとっても職員にとっても、ぶつ

かりながらも相手のことを考えながら、過ごせる“家”で会ってほしいです。

- ・とてもよかったです。当事者の方が大変なご経験をサラリと話され、ご自分の体験をかなり消化されていると感じました。自分の状況を理解してくれる大人 そんな一人の大人になりたいと思います。光元先生のコメントもよかったです。ありがとうございました。
- ・施設をオープンにするということ・・・難しいこともあると思いますが、以前、タイのエイズ孤児の施設、バンロムサイに伺ったことがあります。そこでは設立当初は、石を投げられたりしていたけど、図書館をオープンしたり（パソコンも利用可） サッカー教室をやったりすることで、交流が生まれ、近所の人“あそこならいい”と近所の子が遊びにくる。周りの人が何かできることを考える機会になるかも・・・とは思いますが。

4. 「子どもの人権」について、今後取り上げてほしいテーマ、あるいは学習、交流へのご意見があれば、ご自由にお書きください。

- ・子どもをとりまく社会状況の変化について、データに基づき学べたらと思います。
- ・いじめ問題 自殺 不登校
- ・乳児院に以前勤めていました。乳児院の現状やできることはないか、今後取り上げて頂けたらと思います。
- ・お勉強します。ありがとうございました。
- ・次回もこのテーマでよろしくお願いします。
- ・施設職員の意見交換
- ・虐待 性的被害
- ・話をしていただいた3人の方に感謝の気持ちです。人前で自分のことを話すことは勇気がいることだと思います。これからもそれぞれの目標に向かって頑張ってもらいたいと思います。
- ・今後も勉強の場にしていきたいです。よろしくお願いします。

主催：千葉県児童福祉施設協議会・ちばこどもおうえん広場実行委員会

共催：日本子ども虐待防止学会ちば大会実行委員会

後援団体：千葉県・千葉市・千葉県教育委員会・千葉市教育委員会

朝日新聞千葉支局・千葉日報社・東京新聞千葉支局・

毎日新聞千葉支局・読売新聞千葉支局

主催者事務局：NPO 法人ちばこどもおうえんだん内 ちばこどもおうえん広場実行委員会

〒261-0011 千葉市美浜区真砂 5-21-12 TEL043-205-4046・fax205-4046

E-mail：chiba.kodomo_ohendan@fuga.ocn.ne.jp